村上陽一郎著「あらためて教養とは」新潮文庫、新潮社 2009 年 4 月 1 日刊を読む

教養教育の誕生―教育は家庭で行なうもの―

１．(１)もちろん、ヨーロッパの場合にはキリスト教が社会の基本になっていましたので、家庭教育もキリスト教的な倫理観の枠組みであったには違いありません。

(２)もともと中世には初等教育は制度的に完備していませんでしたから、大部分の人たちは別段小学校へも行かず、また逆に貴族などは学校教育なんていうのはだめだといって、最初から家庭教師をつけるなど、親がこれと思うような教育を受けさせるというのがお金持ち貴族の常道でした。

２．(１)話は変わるようだけれど、病院に入るということも恥ずかしいと思われていました、もともとヨーロッパの病院というのは救貧院ですから。

(２)つまり教育にせよ、医療にせよ、社会が用意してくれる制度に載っかるのは、一番貧しい層になるわけです。

(３)いまの日本社会の 80 歳以上の高齢者にそういう感覚が残っているんですね。

(４)介護保険制度のように、社会が用意してくれるお助け制度に頼ることは恥ずかしいことだから、とてもそんなものにかかれないと言って頑固に自分だけでなんとかしようと苦しんでいる人たちがけっこう多いようです。

(５)社会保障制度は、自力ではどうしようもない人たちが依存するもの――今でも生活保護というのはそういう面がありますけれども――だという認識が、洋の東西を問わず実はあったんですよね。

(６)社会に要求し、社会が当然自分を助けてくれるべきだと主張するようになったのは、ごく最近のことじゃないですかね。

３．そこから考えると、初等教育というものが制度化されていない時代のヨーロッパでは、やはり、人間としてのギリギリの規矩あるいは徳性という意味での教養教育は家庭内でなされるのが本質であって、学校はそれほど頼るべきところではなかったんじゃないでしょうか。

［コメント］

このような意味での教養とは何かを考えることは、デフレ、大不況の現代国家にとっての現代的課題かも知れない。

― 2009 年 7 月 8 日林明夫記―